

茶山 健太 (Sayama Kenta)

オックスフォード大学 地理環境学部 博士課程

自然遺産と平和

“It’s so nice and peaceful here.” 英語話者と田園地方を旅したり、自然の中をハイキングしたりすると、このフレーズを良く聞く。Peaceful という単語は、日本語では“平穏な”などと訳されるが、語源から考えると、peace+ ful (平和に+満ち溢れた/象徴された) という単語だ。日本語の平和という単語は、明治時代に英語の peace に対応させるため造られた単語であり、peaceful という単語に対応する単語は日本語にはない。ただ、自然遺産の一種である大地の遺産(地学的遺産)の保全に関する研究をしている私にとって、自然と peacefulness の接点は、自らの研究と平和という概念の数少ない繋がりなのではないかと考える。この繋がりに着目し、本小論文では、こころの平和・平穏の拠り所としての観点から自然遺産の必要性を論ずる。また、同時に心の平和・平穏のための自然遺産と観光資源としての自然遺産の相違を認識し、異なる保全体制を構築していくことを提言する。

近年、自然と触れ合うことによる心身の健康回復に関する研究が世界的に行われおり、日本では林野庁のイニシアチブで多くの効能が発見されてきた。このうち、森林浴のストレス解消に関する研究は特に進んでおり、筑波大学のチームによると森林散策や緑地散歩を行うことは、精神のリフレッシュになるだけでなく、ストレスへの対処力の向上につながるそうだ。また、森林浴以外にも海岸浴など様々な自然環境において、日常の喧騒から離れリラックスすることで程度は違うが、同じような効果が得られることが生理学及び心理学的研究からわかってい

る。特に、2泊3日などの長期滞在が健康に好影響を与えることがわかっており、自然に滞在できる場所として自然遺産が保全・整備されることが好ましいことは明らかだ。

ただし、自然遺産としての整備、また知名度の向上が、こころの平和・平穏につながるかは別問題だ。まず一つ挙げられるのは、自然遺産として整備されることによる観光客の増加の問題である。森林浴などによって、心理的、生理学的な好影響は、前述した通り現代社会につきまとうストレス源から離れ、環境を変えることによって生まれるものである。ピークシーズンの高尾山や富士山など、自然の中にあっても人でごった返し、いい景色の写真を撮るためには列に並ばなければいけないような環境が peaceful ではないだろうし、こころの平和・平穏に繋がるとは私はとても思えない。

次に挙げられるのが、過度な整備による自然らしさの消失だ。自然を感じるために来た場所の 50m 先に大きな駐車場があり、その 20m 先には大きなホテルがある。大きな国立公園などにおいて、特に目玉となる景観や地形などがある際に、このようなパターンがよく見られる。私も、アメリカのイエローストーン国立公園に行った際に、一番の目玉となる間欠泉が泊まっているホテルのすぐ隣にあって幻滅したことを覚えている。確かにそこには壮大な景観があり、インスタ映えする写真もたくさん撮れるのかもしれない。もちろん、普段見ることができない景色を見ることには、一定のリフレッシュ効果はあることだろう。ただし、このようにアトラクション化してしまった自然を訪れることは、普段の生活における環境の延長上となってしまう、自然

がもたらすところへの平穏という概念からは離れてしまうのではないだろうか。

自然遺産は、確かに観光資源として大切なものだ。むしろ、その維持にはそれ相応の投資が必要なのだから、管理する自治体としては、観光による収益という目に見えるリターンがないと、その保全・整備に手を出しにくい。だからこそ、このように自然から切り離された自然が生まれてきてしまっているのだろう。ただ、自然と、ところの平和の関連性が科学的に実証されてきている昨今、自然遺産のマネジメント方法にも変革が求められているのではないだろうか。

自然遺産がもたらす収益と、ところの平和への好影響を両立するために必要なもの、それはプロモーション段階における差別化だと私は考える。私には、多くの人々が、人だかりのできる観光スポット的な自然遺産が自然に癒され、ところの平穏を得られるスポットだと勘違いしているように思える。有名な地形、綺麗な景色がある場所をアピールする一方で、日々の生活環境から離れることに重きを置いたハイキングルートなどを一部の愛好家以外の人たちにも伝わりやすい形で宣伝し、提供することが必要なのではないだろうか。そして、同じ自然遺産という括りにあっても、観光スポットと、癒しのスポットの二つの要素には違いがあるということを訪問する人々に理解してもらうための工夫により注力するべきではないだろうか。

以上にて論じた通り、私は自然遺産を、観光資源と“自然浴”セラピーの場という2つの活用方法を分けて考え、整備することで、より社会的価値の高いものにできると考える。自然がところの平和・平穏に与える影響に関する研究が進んでいく上で、訪れる人々に対して、前者と後者の違いを説明することも、自然遺産を保全していく上でのこれからの課題となっていく

はずだ。自然がもたらすところの平和・平穏の価値がより社会的に認識されていく中で、自然遺産のあり方が変わっていくのが注視していきたい。

以上